

植物エッセイ

大平 仁一*

山寺の墓

生前、長野が良いと言っていた親戚が亡くなり、万仏山の麓の寺に埋葬したいと寺の住職にお願いした。住職は一人暮らしで、山の生活が好きらしく、町へ下りてはまた寺へ登ってきていた。

私は、この寺のしだれ桜を見たくて春になるとよく行ったものだ。

山の墓地にはイチリンソウ (*Anemone nikoensis*)、オドリコソウ (*Lamium barbatum*)、カタクリ (*Erythronium japonicum*)、ゲンノショウコ (*Geranium thunbergii*)、ドクダミ (*Houttuynia cordata*)、コタニワタリ (*Asplenium scolopendrium*) など、いろいろな自然の植物があった。その中で、ヤマユリ (*Lilium auratum*) が一番目立った。夏には、セミが鳴き、クワガタなどの甲虫がいた。

自然の植物に囲まれた墓で、亡き人々もきっと安らかなことでしょう。亡くなった親戚の息子も名古屋からお参りにきて、墓前に手を合わせた。亡くなったおじさんが、夕方の西日の当たる山でニッコリしているように思えた。

この寺のある山は、万仏山で、山菜と千手観音と清水のでる静かな山である。私は、この山で採れる山菜のミヤマイラクサ (*Laportea macrostachya*) が好きだった。塩漬けや、葉は天ぷらかみそ汁にした。

里山の杉林にある野草

万仏山に登る途中にある杉林を歩くと、多くの山野草が出迎えてくれるので、楽しい。時には鹿と出会えることもある。

この杉林の中で多いのは、ミヤマイラクサ (*Laportea macrostachya*) で、春早く取り、漬け物にしている。近くの部落の人はみなミヤマイラクサを取って漬けている。

その次はワラビ (*Pteridium aquilinum* var. *latiusculum*)。ワラビ取りを楽しむ老人たちがたくさん山へ入っていく。

そんな姿を見ていると、こんどはアジサイが咲

き始めてくる。ヤマアジサイ (*Hydrangea macrophylla* var. *acuminata*) などです。林の中は、雨のやさしさにしっとり包まれます。

ツルニンジン (*Codonopsis lanceolata*) は、この山の草刈りで地区の皆さんが見つけ、根を焼酎漬けにするとのことでした。

でも、この山の良いところは、帰化植物が少ないことです。千曲川の河川敷に行ってみると、帰化植物の多さに心が痛んできます。でも、河川敷の帰化植物の中でも、ニセアカシアの林はあってもいいのでは・・・と思う時もあります。軽井沢へ行ったとき、民宿でニセアカシアの天ぷらを食べたがおいしかった。農薬のかかっていない自然食はよいので、おいしく頂いた。

私が種から育てた花

鉢から芽が出た。その時、私の心によるこびが生まれた。それは、昨年自分で種をまいた「ヤマシャクヤク (*Paeonia japonica*)」だった。鉢を日向に出したり、日陰に入れたり、大切に大切に動かせる片手でゆっくり丁寧に動かした。植物の楽しさを肌で感じ、恋人のように思っていた。水やりをわすれた日は、妻がやってくれていた。そんな妻が今日はイヤに美しく見えた。

そしてこの頃、茶の間のちゃぶ台の上に知らない草のような花が花瓶に生けてあった。妻に聞くと「赤そば」と教えてくれた。ちょっと見ると「ママコノシリヌグイ」に見えた。まだ勉強不足の自分がわかった。はずかしかった。



写真1 ヤマシャクヤク

* 大平 仁一 〒389-2322 飯山市瑞穂 1166-9

ツルニンジン (*Codonopsis lanceolata*) は里山の宝

区有林の刈払いに参加した。お昼を食べて、草の上で休んでいると、すぐそばにツルニンジンが生えているのが目についた。村人はツルニンジンが元気になる薬草だと言い、皆夢中になって掘り、根の芋を集めた。芋が割れると乳液が出てきた。芋を酒に漬けて2年後に飲むと、体に元気が出ることがわかった。

ここは、万仏山の区有林で村中の人が出て草刈りをする。シダ植物が多く生えていたり、ヤマユリ (*Lilium auratum*) を見かけたりする。山にはいつ頃植えたのかエンジュ (*Sophora japonica*) の木が大きくなっていた。村人たちは皆さんその枝を切り、皮をなめて苦いと言っていた。

こんな村人の一人一人の笑顔が私にはすてきに見えていた。

春一番のクロモジ (*Lindera umbellata*) の花

春一番の桜が咲き、またクロモジの黄色い花が咲いた。クロモジの花のきれいなこと。私の心をくすぐっていた。小鳥も近くに飛んでいた。

ある時、出会った老人がクロモジの枝で何か作っていた。聞いてみると、楊子だよと言って見せてくれた。クロモジの枝は良い香りがする。焼酎に入れるとその香りで焼酎はウイスキーのようになる。一年前に私も飲んでみたが、すごく良い香りでわすれなかった。

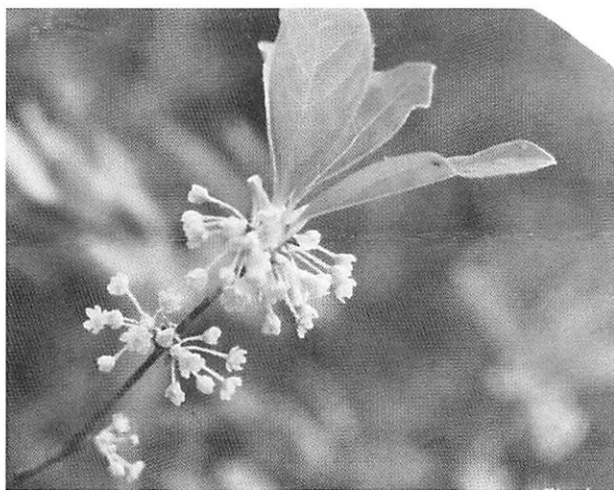


写真2 クロモジ

城ノ山は春の彩り

春、城ノ山を望むと、その色の多様さにおどろい

た。5月は楽しい。白い花、桃色の花、紫色の花、黄色の花などいろいろな色があった。

白い花はヤマナシ (*Pyrus pyrifolia*)、桃色の桜、そして、うす紫色で咲くキリ (*Paulownia tomentosa*) があり、彩りを増していた。

また、山栗 (クリ *Castanea crenata*) があり、実は小型の栗であったが、花の香りはきつかった。近くの林道にヤマシャクヤクがポツンと咲く。それを見ているとなぜか寂しかった。近くの神社にはワニグチソウ (*Polygonatum involucratum*) もあることを思い出していた。

三日月池とアワラ湿原に出かけた

この林に入るには、鈴を用心に付けていく。シラカバ林を通り抜け、ブナやカラマツの林も通り抜け、時々ウリハダカエデも目につく藪の中を歩くと、青い香りと涼しい風が体中を通り抜ける。重い足取りも軽くなり、もう少し進むと小さい川に出た。そこにはミズバショウ (*Lysichiton camtschatcense*) が大きな葉を広げていた。もう少し行くと、ミズチドリ (*Platanthera hologlottis*) の白い花が目についた。

30分ほど歩くと沼があった。きれいで透き通っていて、手で水をすくって飲んだ。近くにミツガシワ (*Menyanthes trifoliata*) があったのだから目に入らなかった。シラカバの根本にハクサンチドリ (*Orchis aristata*) が咲いていた。

そんな場所がいつの間にか好きになっていた。時々見える青空に向かっておいしい空気を吸った。

流れのない川にヤマトリカブト (*Aconitum japonicum*) が頭をたれている。少し虫が付いていた。林の中はギンリョウソウ (*Monotropastrum humile*) でにぎやかだった。奥の沼には2、3のレンゲツツジ



写真3 ギンリョウソウ

(*Rhododendron japonicum*) が咲いていた。美しかった。

足が悪い私でも、こんなすばらしい場所に母ちゃんと来てよかったな—と思った。秋にもう一回来ようと相談した。母ちゃんは秋にも何かきれいな花が咲くの? と聞いた。私は体にいいよ、と答えた。

ヤマボウシの白い花、赤い実

10 年前に植木屋さんに庭に植えてもらった3本の木に花が咲いた。それは、白い花で「たわわ」に咲いていた。大きな花で、私の好きなヤマボウシ (*Benthamidia japonica*) だった。木の実の美味しいことは知っていた。

時にお世話になっている宅老所の所長さんには、秋にヤマボウシの実を20個ほど下さいとたのまれている。花の好きな所長は、時々里山へ連れて行ってくれる。あるとき、大名街道を教えると5人くらいで行こうということになり、その雑木林の中にヤマボウシが咲いていた。また、所長は鍋倉山へ行こうと連れて行ってくれた。そこにはヤマボウシはなく、あっちにもこっちにもタムシバ (*Magnolia salicifolia*) が多かった。

ある日、富倉峠に行かない? と声をかけられ、出かけた。富倉の部落へ近づくと山の中のあっちにもこっちにもヤマボウシが咲いているではないか? 山の斜面にへばりつくような富倉の部落へ入ると古びた民家が多かった。峠を越えて新潟県に少し入り、帰ることにした。急な斜面なので、ヤマボウシも根元の方は曲がっていた。でも、花はきれいだった。

近くには新幹線のトンネルの工事が始まっていた。

木島平の水飲み場

木島平の里山には草の間から清らかな湧き水が出ているところがあった。いつも手ですくい飲んでいった。こんな冷たい水はどこにもなかった。純な水で心を洗われ、体が清められた思いだった。

周りを見わたすと、この水辺の少し上にウラシマソウが咲いていた。一応調べてみようと思い、市の図書館に行き調べると「ウラシマソウ (*Arisaema thunbergii* sp. *urashima*)」と書いてあった。浦島太郎が釣り竿をさげている姿に見立てた名であるであった。その後、木島平の穂高へ行くとそこにもウラシマソウがあり、私を喜ばせた。これで、木島平で2カ所発見したことになる。

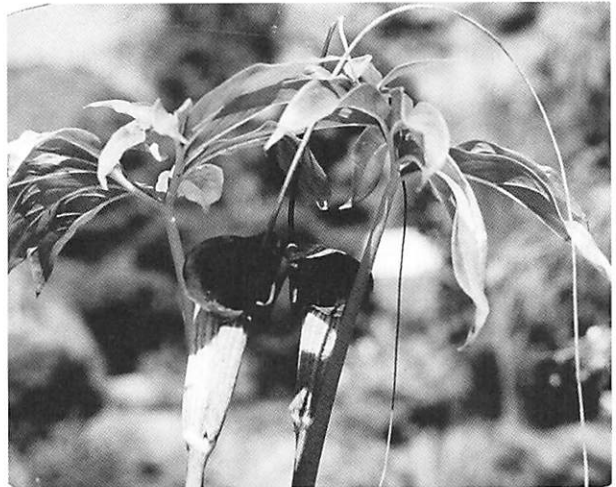


写真4 ウラシマソウ

ショウジョウバカマの不思議な生き方

ショウジョウバカマ (*Heloniopsis orientalis*) はいつも近くの川に行くと見れた。

「のぎらんと猩々袴を採り持ちぬ逝く春の午後を飛鳥の村に」(前川佐美雄)

歌人を思いながら小川に沿って歩く私は、この花の赤や白に想いを寄せた。

そんな時、苔むした石が多い所でこの植物の不思議を見た。葉の先に芽を付け二世となるのでした。



写真5 ショウジョウバカマ

最近の沼や池にヒシ (*Trapa japonica*) が増えた

今年(2010年)の夏は暑い日がつづいた。あちこちの里山の沼に行く私は、そこに必ずヒシの白い花が咲いていることに心を痛めた。

どうしてだろう、去年はなかったのに、今年の浜津ヶ池にはハスよりもヒシが多くをしめ、マガモがおよぐ池の水面が狭くなっていた。また、小菅の里

宮近くの沼の中にもヒシが多くなっていました。柳原地区の山中の池や、外様地区の峠にある熊池にもヒシが増えていた。この池は、モリアオガエルがおり、ミズバショウがきれいで、雑木林に囲まれている。小学生の孫とよく行ったものでした。これより西へ行くと新潟県で、山菜の豊富なところでした。

山の中の熊池にまでどうして今年はヒシが増えるのか、私にはわかりませんでした。

妙高に行く道に淡い花が

秋の9月に母ちゃんと山へトチの実拾いに行く。少し深い山で落葉樹がいろいろあった。トチノキ (*Aesculus turbinata*) は周りが太く 1.5 m ~ 2.0 m くらいあり、またブナ (*Fagus crenata*) も 1 m ~ 2 m くらいあった。時々ツリバナ (*Euonymus oxyphyllus*.) が見え、トチバニンジン (*Panax japonicus*) もあり、しかも群生していた。

私達はトチの実を拾うのに真剣になっていた。ふっと前を見ると黄色の花が咲いているではないか。しかも、行く道沿いに 15 m ぐらいに群生していた。すかさず本を見るとテンニンソウ (*Leucosceptrum japonicum*) と出ていた。初めて会う花でうれしかった。その場でじーと見て心に焼き付けておいた。母ちゃんはトチの実を拾い集めていた。割と藪であり、少し寂しかった。

平家の谷、秋山郷の里にて

苗場山の麓、秋山郷の草原へ行って、たくさんの花に出会い、足の悪さをわすれて歩いた私だった。すぐそばの川は時にイワナが見え隠れしていた。その近くに食虫植物が群生していた。林を少し先に進



写真6 ナツエビネ

むとミネズオウやタデの類だろうか、所々に生育していて花を見るのがすごくうれしかった。

私は、こんな秋山郷が私の人生で訪れたことのある中で一番自然豊かな信州と思っていた。

知らぬ間に私は足を川に入れていた。すごく冷たく感じた。川の水は美味しかった。近くの道のそばに太いトチノキと針葉樹があり、すぐそばにナツエビネがあった。もうすぐ咲きそうな蕾で私の目を引いていた。でも、流れの水の冷たさは足にしみていた。

秋の山菜も美味しい

モミジやブナの葉を天ぷらにして食すると案外にうまい。里の柿の葉は春と秋にも美味しい。また、柿をつぶして瓶につめて半年たつと酢になり、案外美味しい。秋のドクダミの天ぷらもうまい。山の中にはたくさんの食品があった。

また、トチの実は私にとって宝物だった。林の中には色彩もあり楽しかった。ムラサキシメジは少し毒々しいほど美しい。でも自分で見つけたものは愛着がある。

この里山で人工のほど木にナメコがわずかばかり芽を出していた。こんなわずかな出来事でも山の中には不思議な魅力があった。山の魅力は私に力や楽しみをくれている。



写真7 ナメコ

鍋倉山のタムシバ (*Magnolia salicifolia*) と孫

花や植物の好きな孫と山の中に入り、三つの沼を歩いているとザゼンソウの群生を見つけた。小さい水たまりだった。

「サンショウウオがいたよ!」「カエル見つけた

よ！」自然を楽しんでいる孫は飛び回って教えてくれた。

時々あたりを見るとタムシバの花が白く見えてにぎやかだった。この山には何百本と咲いていた。孫は時々この花の名前をわすれ、私に聞く。私が「齒」と言うと、「あー、タムシバ（別名：嚙柴・カムシバ）だ」と答えた。そんな孫がすごくかわいかった。

帰り道には、もう間違えず答えられるようになっていた。



写真8 タムシバ

飯山のツノハシバミ (*Corylus sieboldiana*) は渋い

ツノハシバミはここ飯山周辺のあちこちにあった。たとえば、黒岩山の山を越えて新潟県に入った山にあり、万仏山の林道にあり、城ノ山にあった。

城ノ山では、熊の糞の大きさにたまげていたとき、すぐ近くにツノハシバミが実っていた。そこは、高圧線の鉄塔の近くで、人の歩く道がある所だった。

またある時は、小菅山の奥社へ行く道にツノハシバミがあった。奥の院で手を合わせると私は心がおちついた。しかし、空気が湿っているような気がして気分が良くなかった。歩いていく先々にツノハシバミが目につく。また、ヒメアオキも見えている。この深い山の中には五葉松の子供が少し見え、かわいかった。

ツノハシバミは、昔食べ物不足していた時代に、「おいしいもの」と言って父からよくもらって食べた思い出がある。父は万仏山へ行って取ってきたものと思う。また、毛無山のふもとにも多くあるらしい。毛無山では「アケビ」も父はよく取ってきて私達に食べさせてくれた。

そんな思い出のある近くの里山に、最近ヤマユリを見かけなくなり、悲しさが増すこの頃です。

めずらしい山菜の煮物を食べた

近所の友人がよいものを届けてくれた。それは山菜だった。おもしろい「ハナйкаダ (*Helwingia japonica*)」の葉っぱだった。夕飯に煮付けをしてもらい食べた。醤油で味付けし、やわらかくおいしかった。残っていた葉っぱを見ると、葉っぱに花が咲いていた。花と言っても小さい花の固まりのようなもので、美しくはない。味の付けよう、食べようで柔らかくてうまい。

母ちゃんとはりの家にも持って行ってあげた。帰りには天ぷらをもらってきた。クワ (*Morus bombycis*) の葉の天ぷらで、おいしそうでした。

昔は桑畑があったが、今この辺の桑はヤマグワでした。昔、桑の木の茸を取って食べたことを思い出した。カリカリしたおいしい味でした。その茸は「カタハ」とか呼んでいた。今になるとなつかしい茸で、この頃になると焼いて食べたいと思うこともあった。

黄色の花にさそわれて

5月、北竜湖を歩くと、道脇にダンコウバイ (*Lindera obtusiloba*) の黄色い花が咲く。毎年行っていると当たり前のように歩いていたが、私はこの花の美しさにほれた。いつも気にしていなかったが、いつも見ているとこの花のきれいさに心が奪われた。この道を歩いていると、ダンコウバイの花があって、静かな林があって、林の間より見え隠れする湖が私について来た。時に朝早いときは鹿にあうが、私は友達と思っている。すると、鹿も私の方へ顔を向けてくれたりする。



写真9 ダンコウバイ

私の好きな場所である。病気になってからは、ますます自然の姿が好きになった。

杉林へ入ってみると石垣があった。考えてみると、昔の田や畑に杉を植えたのだろう。昔の人の苦勞が目に見えた。

美しい花、その花とは？

晴れた日、上の平の山へ行く。道の周りに白い花が咲いていた。その花はノリウツギ (*Hydrangea paniculata*) で、少し長い花がついていた。時々近くの木で日陰になる青空がきれいだ。ノリウツギの純な白色が私はたまらなく好きだった。

そんなこの山の楽しさを私は味わっていた。また、近くにはツバメオモト (*Clintonia udensis*) の実が青く実っているではないか。標高 700 m のこの山に私はなぜか引きつけられていた。時々近くにアサギマダラが飛び回る。

いつも夏が近づくと友人と来る楽しい場所だった。



写真 10 ノリウツギ

郷愁を誘うこの花は増えていた

私が野草や花を好きになったのは、シラネアオイ (*Glaucidium palmatum*) を知ってから半年たった頃

だった。仲の良い友人と山へ遊びに行った。そんな時、多くの花のことを知り、私なりに心を開いていった。

急な山中の川の水は、それはそれはきれいで、心に残っていた。その小さな清流の石は崩れやすかった。でも、私は他人の知らない所を見に行くのが楽しみだった。そんなとき、林の近くに紫色が見えた。近くへ行くと花だった。よく観察すると、それは私の好きなシラネアオイでした。芽が多く出て、多くの花芽が見えてすごく増えているようだった。これを見た私はすごくうれしかった。

こんな光景はいつまでも世に残したいものだ。鍋倉山の私の好きな場所で静かに残したいものだ。



写真 11 シラネアオイ

やさしいフデリンドウと私

信濃町の里山へ妻と山旅に行く。

山へ入ると春蘭が多くあった。また、フデリンドウ (*Gentiana zollingeri* Fawcett) が咲いていた。高さは 5 cm ぐらいで、うす紫色で空に向かって咲いている。春のこもれびの所に枯れ葉の間から顔を出していた。車いすは入れないので、杖をついてゆっくり歩いて行く。時にツツジも咲いていた。近くに背の高い白木蓮ハクモクレン (*Magnolia denudata*) の花びらが落ちていた。きれいな白だった。